



中国河南省・開封市郊外

3500年の歴史で失った 中原の“風景”

世界銀行タスク・チーム・リーダー 鎌田卓也

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



これは中国河南省の古都、開封市郊外の冬の景色である。どんよりとした曇り空を背景に、褐色の畑地が地平線まで限りなく広がっている。同省南端の信陽市、また西の洛陽市あたりまで、この景色は車で数百キロ走っても変わらない。

この風景はどこか人工的に見える。しばらく車窓に目を走らせるうち、ふと、森林がまったく目に入らぬことに思い当たる。自生の雑木林ややぶもない。時折現れる木々は、農道や畑境に沿ってぼつりぼつりと人手で植えられたものばかりだ。思えばここは中国史の中心といわれる「中原」地域である。同省南部には紀元前1500年ごろの古代遺跡「殷墟」がある。その後、周王朝から現代に至るまで、営々と農業が営まれてきた。現在も、地方道には豚を載せたトラクターや、色づきのよい人参を満載した軽トラックが盛んに行き交う。中原は数千万人の人間を長年養ってきたのである。3500年以上の歴史を通じて、森林は開墾されて畑となり、木々はまきや資材となってきたのであろう。戦禍や飢饉で雑草までもが食べ尽くされたこともあったに違いない。

地球の温暖化が進む中、森林保護は中国でも話題になっている。しかしこれが難題であるのは、きのう今日に始まったことではないようだ。

(写真も筆者) ㊞